

2. ろう学校と難聴学校

ろう学校と特別学校局（SPM）

スウェーデンのろう教育は、バイリンガルろう教育プログラムを基調とするろう学校が担っている。スウェーデンには現在ろう学校が6校ある。スウェーデン全土が5つの地域（ストックホルム近郊，北部，西部，中部，南部）に分けられ，それぞれの地域に1つのろう学校がある。地域ろう学校とも言われている。それぞれの地域に住むろう児は原則として，その地域ろう学校に通うことになる。地域ろう学校とは別にもう1つろう学校がある。主として重複障害を持つろう児に対応したろう学校だ。これらはすべて国立のろう学校である。

かつてそれぞれのろう学校は独立性が保持され，大きな権限が与えられていた。ところが教育改革の大きな波に巻き込まれることになる。これまでも多額の税金がつき込まれている，ろう学校への風当たりが強かったそうだ（ちなみに現在，特別学校として存在するのは，ろう学校のみで，他の障害児はインクルージョン政策の下，地域の通常の学校に通っている）。たびたび国から地方に移管をするよう働きかけがなされたが，ろう協会や親，教師の反対に会い，果たせないでいる。ところが教育改革の流れの中，2000年7月に特別学校局（Specialskolemyndigheten: SPM）が設置された。そして，すべてろう学校は特別学校局の管轄に入ることになり，特別学校局がろう学校の管理運営に責任を持つことになった。同時にろう学校の権限も大幅に制限された。実はこの教育改革の中で2つのろう学校が廃校になった。かつて地域のろう学校のほか，重複障害に対応したろう学校は3校あった。そのうちの2校が生徒募集を停止し，リソースセンターとなったのだ（ただ最近の情報によると，そのうちの1校がまた復活するとのことだ）。

特別学校局は，2000年以来，毎年事業報告書を作成し，インターネットのホームページ上で公表している。内容は，各ろう学校に在籍する児童生徒や教師の人数，予算，それに生徒たちのナショナルテストの成績などである。これにより各ろう学校の教育の成果が白日の下に晒されて，評価を受けることになる。明らかにされた実績は，必ずしも好ましいものだけでない。前稿に示したように，卒業生のナショナルテストの結果があまり芳しくないこと（表2-1），それに全体として生徒数が少しずつ減少していること（表2-2）なども示されている。

表2-1 ろう学校卒業生の学業成績（特別学校局の年次報告書より）

	2001/02	2002/03	2003/04	2004/05	2005/06
3科目（中核科目）合格者数	24	28	25	28	17
（割合）	48%	47%	40%	38%	27%
卒業生数（重複児を除く）	50	59	63	73	63

表2-2 ろう学校在籍生徒数の年次変化（特別学校局の年次報告書より *は予測値）

	2000/01	01/02	02/03	03/04	04/05	05/06	06/07	07/08
在籍生徒数	638	642	606	587	550	516	490*	471*

これに対して，当然のことながら，特別学校局や各ろう学校は説明責任を果たさなくてはならない。先に紹介した人工内耳装用児（以下，CI児とする）を持つ親の会の機関紙

Barnplantabladet (2004 年春号, p. 5)に、会長から特別学校局に対しての質問状が掲載されていた。内容はこうだ。多額の税金が投入されているろう学校の生徒数が減少してきている。それに対して、CI 児は増加しているが、その子どもたちに対するろう学校の対応は必ずしも十分でない。ろう学校につき込まれている予算をもっと CI 児の教育につき込むべきではないか。これが質問内容である。次の同機関紙 (2004 年秋号, p. 14) に特別学校局長の回答が掲載された。数字としては、確かに生徒数は減少しているが、スウェーデンは小さな国なので、単年度だけを見て判断はできない。もう少し長期的に見る必要がある。また CI 児への対応については、国立特別教育研究所 (Specialpedagogiska Institutet; SIT) などで積極的に取り組んでいる、と。(確かに 2004 年の時点ではそう言えるかもしれないが、表 2-2 に示すように、その後も生徒数の長期低落傾向は動かしがたい事実のように見える。)

いずれにせよ、公の下で関係者が議論しながら、これからのスウェーデンのろう教育を作りつつあると言えよう。また特別学校局の設置が、必ずしもろう学校の独自性の制限や取り組みの足かせとなっているばかりとは言えない。特別学校局が、研修会を企画したり、いくつかの研究プロジェクトも立ち上げたりしている (例えば、親や生徒に対して、ニーズや学校の満足度調査を実施し、それに基づいてろう学校に提言を行っている)。特別学校局が設置されたことによって、各学校の成果が互いに比較される点、大変だが、ろう学校同士の関わりも広がってきた、とあるろう学校の校長先生が語っていた。

ろう教育とそれを取り巻く現実の変化を、ろう学校がどのように受けとめているのか、それに対してどのような取り組みを試みているのかを学ぶため、いくつかのろう学校を訪問した。ろう学校では、学校概要の説明を受けたり、授業の参観を行った他、できる限り校長等管理職や教師にインタビューを行った。インタビューの主な質問項目は、以下の通りであった。

- 1, この 20 年間のスウェーデンのバイリンガルろう教育の成果をどのように評価するか? 特に、ナショナルテストの成績が芳しくないことをどのように見るか?
- 2, この 5 年ほどの間のスウェーデンにおける変化をどう考えるか? 例えば、CI 児の増加について。
- 3, バイリンガルろう教育の中で聴覚の活用をどのように位置づけているか?あるいは人工内耳などで聴覚の活用ができるようになることが教育実践にどのような変化をもたらしているか?
- 4, ろう学校に来ていない、インテグレーションしたろう児、難聴児、CI 児へのサポートを行っているか? 具体的にどのようなサポートを行っているか?

クリスティーナろう学校の取り組み

まず北部地域のろう学校、クリスティーナろう学校を訪れた (スウェーデンのろう学校の名称に、実は「ろう」という文字が入っていない。正式名称は、Kristinaskolan。文字通りでは「クリスティーナ学校」である。ただ本稿では、日本の現状に合わせ、「ろう学校」と記している)。クリスティーナろう学校を訪問先にまず選んだ理由はいくつかある。まずスウェーデンの友人から、ここでいろいろな斬新な取り組みが行われているとの情報を得ていたからだ。また地方にこそいろんな課題が最も直に現れるのではないかと考えた。とにかく北に向かった。

スウェーデンは地図を見てわかるように南北に長い国だ。ストックホルムからまず超特急

X2000 によってスズバルに。およそ 3 時間半。それからさらに北へ行くバスに乗る。40 分ほどでヘノサンドという町に行く。ここにクリスティーナろう学校がある。バスをおり立つと、まさに北欧らしい、落ち着いたのがある、ゆったりとした街並みがあった。この日はたまたま日曜日の夕方だったが、本当に人が少ない。人口密度の小ささを実感した。

クリスティーナろう学校の注目すべき取り組みは、2 つある。1 つは、「訪問週間」プログラム。インテグレーションした子どもたちへの支援に早くから取り組んでいる。どのようにこの取り組みが始まったのか？プログラムの内容は？その効果は？もう 1 つの大きな取り組みは、「聴覚クラス」が設置されていることだ。バイリンガルろう教育が実施されている学校で、なぜ聴覚クラスがあるのか？そもそも聴覚クラスにどのような子どもたちが在籍し、そこでどのような教育実践が行われているのか？クリスティーナろう学校のホームページを見ると、この聴覚クラスは 1985 年に設置されたとある。1983 年、全国的にバイリンガルろう教育に移行した、まさにその 2 年後に、ろう学校の中に聴覚クラスが設置されていたのだ。ご存知のようにバイリンガルろう教育がここでスタートしたとき、聴覚の活用には消極的だった。その当時の学習指導要領にも、スウェーデン語は主として読み書きを通して学習すると書かれている。どのような契機で、この聴覚クラスが設置されたのか？疑問がますます膨らんでいく。

スウェーデンのろう学校はどれも美しい。クリスティーナろう学校も湖のほとりにあり、絵葉書になるような美しい学校だ。建物の外観もしゃれているし、内装も学びの場所にふさわしく、色や光がよく考えられ、またいろんな小物や掲示物も工夫して配置されている。対応してくれた先生は、この学校の副校長だ。まずこの学校の現状や課題について説明していただいた。

学校の設立は古く、1868 年だ。北部の学校であるがゆえにいろいろと苦勞も多いようだ。まず学校に来ること自体が大変とのこと。近くの子どもはタクシーで通学するが、遠くの子どもは、寄宿舎に入る（寄宿舎と言っても、グループホームのようなもの、数人ごとの集団で家庭的な生活をしている）。バスを使ったり、電車を使ったり、飛行機を使ったり。飛行機などはいったんストックホルムに行ってそれからヘノサンドに来るとのこと。今の学校の大きな課題の 1 つは通学の問題だという。遠方からの来る子どもたちのため、月曜日は昼から始まり、金曜日は午前中に終わる。また休日も取りやすいようにばらばらにあるものを 1 週間にまとめたりしているとのこと。

現在の生徒数は 77 人。日本の中規模のろう学校の生徒数と同じくらいだろうか。ただし、スウェーデンのろう学校は基礎学校レベル（日本の小・中を合わせたもの）の教育課程のみ（一般の基礎学校は 9 年制だが、ろう学校は 1 年プラスされ、10 年制となっている。また高校レベルの高等聾学校は別にある）。クラスは 2 つに分けられ、手話クラスが 55 人、聴覚クラスが 22 人。聴覚クラスはこれに 9 人が加わる。この 9 人は国を通して正式に入学しているのでなく、地域のコミュニケーションを通して学校に来ているとのこと。聴力障害の程度がそれほど重くない（ろう学校の対象でない）が、地域の学校では一般に 20 人や 30 人の大きなクラス（日本と比べると大きくないが・・・）なので、その中でなかなかついていくのが難しい。ここではとても小さなクラスで、ついていけるということで、コミュニケーションの学校に在籍しながら、このろう学校で勉強をしているのだ。以前はこの学校に来る聴覚障害児は 60 dB 以上がおおよそ基準であった（現在はフレキシブルになっている）。そのためそれより軽度の子どもたちは自動的にコミュニケーションの学校に行くことになるが、そこで何らかの理由でついていけない子ども達もいる。その子どもたちがコミュニケーションの学校に籍をおきながら、ろう学校に通っているのだ。予算の出所

は違うが、学校の中で特に区別していないとのこと。プレスクール（1年制）にも同様に正式の就学（正式の入学者は4人）ではないが、2名が地域のコミュニケーションから通っている。在籍している子どもたちだけでなく、地域にいる子どもたちへの様々なサービスも展開している。

早速、副校長に疑問点の1つ目、聴覚クラスの話をお聞きしたい。聴覚クラスは、まさに聴覚を活用して指導しているクラス。教室の言語は音声スウェーデン語だ。ただし、必要に応じて手話を併用したりしている（音声語対应手話）。また別の時間には教科としての手話（これはスウェーデン手話）の授業もある。発音・発語に関しての個別指導の時間もある。1週間に20分×2回程度、STによる指導がある。手話クラスに在籍している生徒にも希望に応じて発音・発語の個別指導を受けることができる。この指導に対する親（特にCI児の親）の要望は大きい。彼女によると、かつてのろう教育はそれほど難しくなかった。手話クラス1つでやっていけた。現在は教師にとっても、親にとっても、子どもたちにとっても、状況が複雑になり、難しくなっている。子どものニーズを見ながら、どのように聴覚やスピーチを使うかを考えないといけない。手話とのバランスも大切。集団をどのように作るかも難しい。ニーズに応じてクラスを細かく分けてしまうと結局、1つの集団が小さくなってしまう。聴覚クラスと手話クラスについて、人数が少なくなってしまう場合には分けないこともある。ただそうすると同じ1つの教室にスピーチと手話が同居することになる。その中でどのように手話とスピーチを使うかも難しい問題。スピーチが使える子どもだけがしゃべってしまうとろうの子どもはついていけない。どのように教師がサポートするか。授業の中で、教師が時には手話通訳者の役割を担うこともある。いろいろと試行錯誤しながら教室内での活動を工夫しているとのことだった。

CI児についても話を聞きたい。20人がクリスティーナろう学校に就学している。ほとんどが手話クラスに在籍。ただし授業によっては聴覚クラスに入ることもある。北部地域では現在1人のCI児がインテグレーションしている（ただし、すべてのCI児に関して情報を持っているわけではない）。彼にはアシスタントがついているようだ。アシスタントは（たまたま）手話もできるので、それなりに手話も学習できている。が、医療関係者は親に手話に関しての情報を十分に提供していない。今後、インテグレーションをするCI児が増えていくことが予想されるが、果たして十分な学習環境が確保されるか、危惧しているとのこと。

次に「訪問週間」について話を聞きたい。訪問週間とは、インテグレーションをしているろう児・難聴児が、ろう学校に1週間滞在して、様々な学習活動に参加するプログラムだ。2002年から始まった。以前からこのようなプログラムに対する要望があり、学校としても個々に対応していたが、子どもたちを一緒に集めたほうがいいのでは、ということで正式にプログラムとしてスタートした。プログラムへの参加費用は、児童・生徒が居住しているコミュニケーションが出すとのことだ。プログラムの目標は、まず手話を学ぶこと、そしてインテグレーションしている子ども同士のつながりを作ること。多くの場合、周りに自分しか聴覚障害者がいない。このプログラムでは、互いの体験を共有したり、アイデンティティを獲得したりできるように援助している。またろう学校の生徒との交流も行っている（一緒に授業を受けたり、課外活動に参加したりする）。他のろう学校でも1日体験コースのようなプログラムがあったが、このように組織的にやり始めたのはここクリスティーナろう学校が初めてとのことだ。

今年の訪問週間の参加者は、1-4年生が4人、5-9年生が8人。秋学期、春学期と1週間ずつ、計2週間行っている。課題もある。どのように参加者を募るかという問題。インテグレーションの状況については、ろう学校としてなかなか把握できていないという。それでいろんな

ネットワークを使って、このプログラムに参加する生徒を募っている。例えば、地域の教育事務所に所属し、主としてインテグレーション児の援助を行っている、特別支援教育の専門家にコンタクトをとったり、関連する病院などに働きかけたりもしている。またインテグレーションをしている生徒を担当する教師のための研修コースが特別教育研究所であるが、それに参加している教員を通してインテグレーション児に関する情報を把握したりしているとのこと。

校長先生にもお話をうかがうことができた。彼は、1974年に、この学校の先生になり、現在までおよそ30年間勤めている。まさに口話法から、トータルコミュニケーション、そしてバイリンガルろう教育へと、時代の流れを、現場という内側から見てきた。1974年にこの学校の先生になったとき、手話はできなくてもいいと言われたとのこと。それからトータルコミュニケーションを経て、1983年にバイリンガル教育に移行した。が、このろう学校では1985年に聴覚クラスができています。

手話と読み書きに焦点を据えるバイリンガル教育の実践の中で、どうして聴覚クラスができたのかとうかがった。まずろう学校で手話の活用が始まって、インテグレーションしていた多くの子どもたちがろう学校に帰ってきたという。聴覚活用や口話だけの生活でなく、確かなコミュニケーションをろう学校に求めていたのだろう。ただ彼らは手話を知らないで、ろう学校でなく、近隣の通常学校の中に設置された難聴児クラスに入れられることになった。そのあといろんな経緯があり、ろう学校の中に戻された。80年代に寄宿舎が地域の小さなアパートに分散したので、そのスペースを使って、難聴児のためのクラスが設けられたのだ。それが現在の「聴覚クラス」となった。ただ同じ敷地内にある聴覚クラスは、建前上、ろう学校とは別の名称がつけられた(Hofskolanと言われたそう)。ろう学校の中に聴覚クラスがあることが政策的(イデオロギー的?)に許されなかったのか?実は83年以前もインテグレーションしている生徒がろう学校に戻ってくることがあったが、当時はトータルコミュニケーションの時代であったので特別にクラスを設ける必要がなかった(手話が大してできなくともトータルコミュニケーションのクラスでは何とかやっていたということか?)。

83年以降、教室言語が手話になったので、インテグレーションから戻ってきた生徒たちは(手話を知らないで)、教室に居場所がない、それでその子どもたちだけが集められて聴覚クラスが作られたというのだ。インテグレーションから聴覚クラスに帰ってきた子どもたちの多くは、地域の学校の大きなクラスで孤立していたり、いろんな問題行動を起こしたりしていたそう。ある生徒のエピソードを紹介してくれた。この生徒は、地域の学校では暴力を振るうことで有名だった。ろう学校に移ったあと、問題行動が激減した。もとの学校の先生が、その生徒の問題行動をあまり聞かなくなったがどうしたのかとたずねてきた。ろう学校でその生徒はもう問題行動を起こす必要がなくなった(コミュニケーションができるので)と答えたと言う。

現在ろう教育の大きな変化についてどのように考えているかとうかがった。ろう学校は1938年に国立になった。それからだいたい10年ごとに国から管理についての見直し論議が起きてきたとのこと。国はお金がかかるのでろう学校を手放したいとの意向。2000年のときも、各ろう学校はそれぞれのコミューンの管轄になるようにと国から提案があった。しかしそれはうまくいかず、結局各ろう学校は対象とする地域(広域)が指定され、その全体を管理する組織としてSPM(特別学校局)が作られたのだ。

学力が期待したほど伸びていないとの報告に関してはもうかかった。「ナショナルテストが始まった当初、私もそう思った。成績がよくない。どうすればいいのかと当時考えたが、

Svartholms 氏（ストックホルム大学教授）との話の中で考えが変わった。ろう児たちは、よくやっているのではないかと。子どもたちは手話が第一言語。学校に入学してスウェーデン語を第二言語として学習している。それから 10 年ほどの間に聴児と同レベルにまでスウェーデン語を発達させた生徒が 40% もいる。それはよくやっていると言えるのではないか。「また移民の問題や聴覚障害以外の障害の問題もある。大まかに言うと、ほぼ生徒の 3 分の 1 はいい結果を出している。3 分の 1 はもともといろんな問題（移民や知的障害の問題）を抱えていてなかなか難しい（特別のサポートをしても）。3 分の 1 は何らかのサポートをすると何とかいい結果を出すことができる（例えば、軽度発達障害の問題）」とのこと。聴覚障害を持つ軽度発達障害児の問題は、この調査の間、たびたび話題になった。この件については、次回以降にまとめて議論する予定だ。

聴覚クラスを訪問した。生徒は 8 人。3-5 年生の合同クラス（9-11 歳）。最近 1 人増えたとのこと。その生徒は「訪問週間」をきっかけに地域の学校からろう学校に転校してきた。聴覚クラスでは、手話も活用されているが、主にスピーチで授業が行われている。また聴覚補償技術もよく活用されている。例えば、最近開発された Phonak のラジオシステムを利用。補聴器に特別の機械を取り付けると生徒同士でお互いの話がよく聞こえるようになったという（先生の声だけでなく、生徒同士の対話を重視している点、スウェーデンらしい）。この聴覚クラスには、内容によっては手話クラスから CI 児も時々来て、共同で学習を行っているとのこと。ただ聴覚だけを使っているのではなく、手話も活用している。教室の中でどのように手話を入れ、音声を入れるか模索している状態だという。

担当の先生は、3-5 年生の特別な学習活動として、読書活動にも取り組んでいる。25 人を 4 つの「読みグループ」に分けている。手話+書きことばのクラス、手話+スピーチのクラス、スウェーデン語が主のクラス（手話単語や口話つき手話がある）、手話/スウェーデン語のクラス（どちらの言語が主かまだわからない子どもたち）、である。スウェーデン語が主のクラスでは、教師 2 人が担当。1 人が話し、1 人が手話で通訳をしたりしているとのこと。彼女は、「基本的には子どもが言語を選択する。言いたいことを言いたい言葉で話せるということが大切。間違ふことを恐れない。ただ手話も必要。例えば、難聴児や CI 児も高等教育へ行くと手話通訳を利用している。」と言う。内容に関しては、絵本を読んで、そのストーリーグラマー（物語文法）を分析するような活動をやっていた（類似の活動は、鳥越・クリスターソン(2003), p. 59 に少し紹介した）。

先生は、手話に関して興味深いエピソードを語ってくれた。口話つき手話について、実は数年前までろう学校で使用することを「禁止」されていた。現在は個々のニーズを配慮するという考えで、「解禁」されたとのこと。実は以前から使っていたが、公式には使っているとは言えない雰囲気だった。先生は 22 年前にろう学校教師をスタートした。そのときは、丁度バイリンガル教育がスタートした頃（ここではほぼ同時に聴覚クラスが設置）。聴覚クラスでは、口話つき手話が自然だった。でも外ではそれを使っているとは言えなかった。やっと 4-5 年前から許容されるようになってきたとのこと。スウェーデンでも聴覚活用の可能性を持つ難聴児への教育が注目されるようになってきたのだろう。1 つの方向として、聴覚の活用をしている子どもたちも手話で指導を受ける（少なくとも集団では）という選択肢があるだろう（そのあたりの様子は、鳥越・クリスターソン(2003)のマニラろう学校の授業の様子でも紹介した）。集団の中ではスウェーデン手話のみ。聴覚やスピーチは個別指導の枠組みで利用する。もう 1

つの選択肢として、まさに聴覚も活用しながら手話も活用するという選択肢。聴覚が活用できるのであれば、その活用（あるいは口話も含め）を前提としている口話つき手話（音声語対応手話）の使用も納得できるだろう。もちろんこの子どもたちもスウェーデン手話を学習する（第二言語として）意義はあるが、教室言語とするかどうかは別の問題と考えるのだ。スウェーデンでは、ろう児も聴覚を活用できる難聴児もバイリンガルになることが教育の到達目標だが、その経路は異なっているということだろう。

授業見学を終えたあと、最後に副校長と話をする。これからの取り組みとして、難聴児（聴覚クラス）の手話学習をどう補償していくかが課題だという。例えば、手話に関して SPM のプログラムでは、ろう児本人（ろう児のための幼稚園）や親・兄弟（手話講習会）への取り組みはあるが、難聴児本人へのプログラムはない（せいぜい週に数時間の「手話」の授業）。また親は以前よりも、聴覚の活用や難聴児・CI 児への取り組みについて、強く要望を言うようになってきたとのこと。また医療機関との関係の問題もある。医者はなかなか手話のことを言わない。CI が期待したほどうまくいかなかったらどうしようもない。手話があったほうが良いとのこと。

クリスティーナろう学校の取り組みは、子どもたちのニーズから出発するというをやってきた。その中で先駆的な取り組みとして聴覚クラスを作ってきたし、また CI 児にも対応してきた。ある意味では、バイリンガル教育の議論の中で、当時は「折衷的」だと、とかく批判の対象になっていたのだろう。難聴学級は別の名称を使うことを余儀なくされたり、子どもたちにとって、ある意味で自然な口話つき手話を使っていると学校の外で言えなかったり……。サンギータ氏（第一章を参照のこと）の言う、まさにイデオロギーの問題を垣間見ることができよう。

スウェーデンのろう教育は、いわば難聴児もろう児もすべて「ろう」と見なしてきたと言えるのではないかと（逆に言うと、日本のろう教育は、難聴児もろう児も「難聴」と見なしてきた）。そういうイデオロギーなのだ。だから聴覚を活用すること、それを日常の教育の中で生かすことが考えられていない（個別指導では発音指導があるが）。ある意味でその方が教育システムとしては効率がいい、やりやすいかもしれない。エヴァさんが言うように、昔は余り考えなくて良かった。とりあえずみんな（難聴児も含め）手話クラスに入っていたから。が、子どもたち（あるいは家族）にとってはどうなのだろうか？ トータルコミュニケーション（あるいは口話つき手話）への批判がなされるようになって久しい。もちろん手話言語の復権のためには、その当時、普及していた口話つき手話を批判する必要があったのはうなずける。聴覚から音声言語が入っていないのであれば、口話つき手話では、手話も音声言語も不十分にしか表示できていないので、言語入力としては不十分といわざるを得ない。ただこれは、聴覚を活用していないということが前提。聴覚が活用できている場合には当てはまらない。でもどの程度、聴覚から音声言語の入力があれば、口話つき手話が機能するのか。クリスティーナろう学校の実践では、親や先生が選ぶのではなく、とりあえず子どもたちに選択をさせていた。ただ、共通のコミュニケーション手段を持つ集団をどう確保するのか、異なったコミュニケーション手段をもつ集団の中でコミュニケーションをどう確保するか、など解決すべき課題が多い。それに関しては、まだまだ試行錯誤の状態だ。

最も小さなろう学校、ヴェナーろう学校

ヴェナーろう学校は、ヨテボリの CI 児を持つ親の会のシンポジウムの帰りに立ち寄った。ヨテボリから電車でおよそ 1 時間。ヴェルスボリはとっても小さな町だ。駅から歩いて 5 分ほどのところにヴェナーろう学校がある。

ここの学校の教育実践の概要について、ホームページで予習をしておいた。ここでも聴覚クラスが設置されていた(2005 年のこの調査の時点で、聴覚クラスを設置していないろう学校は、マニラろう学校とオスターバンクスろう学校の 2 校のみであった)。また CI 児への対応について十分取り組んでいると強調して書かれていた。ろうクラスは、手話により指導しているが、聴覚クラスでは、補聴技術の支援により音声スウェーデン語で指導。手話は必須の授業科目。ニーズに応じて手話を併用したり、ろうクラスとの共同学習を行ったりしているとのこと。

学校に到着。早速校長先生に挨拶した。彼女は、このろう学校に移って、まだ 4 年ほどだという。以前は一般の基礎学校や高校にいたという。ろう教育の専門家でない先生が校長になることはスウェーデンでは異例だ。ろう教育の専門よりも、基礎学校や高校での管理職としての手腕が買われたのかも知れない。そのような力をこの学校は今求めているのだろう。

ヴェナーろう学校がカバーする地域には、スウェーデン第二の都市、ヨテボリ市がある。が、必ずしもヨテボリ市出身の生徒は多くないようだ。ヨテボリ市には、あとで紹介するカナバックス学校がある。この学校との関係抜きでは語れない。カナバックス学校は、一応難聴学校ということになっているが、ろうクラスもある。そして、カナバックス学校が近年生徒数を増加させているのに対して、ヴェナーろう学校は生徒獲得に苦戦している。ある意味で、現在のスウェーデンのろう教育の困難さの最前線にあるろう学校とも言えよう。

コーヒーを飲みながら、校長先生に学校についての全般的な話をうかがう。生徒は 69 人。手話クラスが 58 人、聴覚クラスが 11 人。聴覚クラスはスピーチのみで授業。CI 児は 4 名。盲ろう児が 1 人(彼も CI を装用)。現在小学 2 年が欠学年。生徒数に関しては、長期低落傾向とのこと。今後の予想では 2005 年 67 人、2006 年 62 人になるとのこと。

早速、校長先生にこの数年のろう教育の大きな動きに対しての話をうかがう。彼女によると、CI の性能がもっとよくなり、早期に装用するようになるとますますろう学校の生徒数が少なくなる。それはそれとしてよいのではないか。ひょっとしたらろう学校がなくなるかもしれない。ただ様々な問題を抱えている子どもたちも依然といる。例えば CI がうまくいかない子どももいる。今在学している 1 人の子どもは 2 回装用手術をし、結局 3 回目の手術で取り外した。また移民の問題もある。移民のバックグラウンドをもつろう児が増えている(2004 年の資料では、家庭でスウェーデン語以外が話されている生徒の割合は、およそ 20%。その親たちはスウェーデン語だけでなく、手話も学ばないといけないので負担が大きいとのこと)。またスウェーデンでは結構、外国(特に発展途上国)から聴覚障害児を養子に迎えることも多いようだ。そのような子どもは小さい頃何も教育を受けていないことが多い。また何らかの心の傷を負っていることもあるという。そのような子どもたちの教育も大切な問題であり、ろう学校が主として担っている。それから重複障害の子どもたちの問題も。重複障害を持つ子どもたちのためのろう学校(オスバッカろう学校)があるが、親たちは遠方のろう学校でなく、近くのろう学校に入れたがるという。通常の教育の他に、特別な支援を受けている生徒の割合は、27.5%。また知的障害のための特別な教育課程(Sarskokan という)を受けている生徒の割合は 5.8%。いずれも近年増加傾向だとのこと。重複障害をもつ子どもをろう学校が受け入れると、財政的な圧迫があるという。例えば、重複障害児には教師の手を多く取る。教師の研修も必要で、そのための

予算も必要だ。オスバッカろう学校では生徒一人当たり、通常のろう学校よりも2倍の補助金がある。地域のろう学校で重複障害児を受け入れても、同じようには補助金が来ない。結局ろう学校の中で何とかやり繰りをしなくてはならないそうだ。学校の管理職として考えるべきことは多い。

最近の教育改革の話もうかがった。2000年にろう学校がSPMの管理下になったことで、お互いに協力しやすくなったという。それまでももちろん協力関係があったが、SPMが中心になっているような共同事業が展開しているとのことだ。またろう学校同士、相互に刺激しあえるという。ろう学校が成績に関して苦戦しているのでは？と話をすると、「実際ナショナルテストや単位の取得に関してはあまり成績がよくない。ただし移民の問題や他の障害も考慮に入れる必要がある。またナショナルテストがろう児にとって果たして公正なテストかどうか。ろう児にとってスウェーデン語は第二言語。英語は第三言語。でも聴児と同じように競わないといけない。また高校に入るには、スウェーデン語と英語と数学が必須。でも、なぜ第一言語である手話がここに入ってこないのか？」と。

CIなどでインテグレーションした子どもへのサポートも徐々に実施しつつあるとのことだ。「実は、今日もインテグレーションをしている子どもの親がやってきて教師と話をしている」と言う。その子どもはCIを装用して地域の小学校へ通うようになったが、なかなか授業についていけない。で、ろう学校に試行的に1週間通うことになった。手話を少しずつおぼえ、同じ年齢の子どもたちと生き生きと生活していた。周りの判断では、彼女には手話が必要とのことだった。ただ親は子どもをろう学校に移すとの決心にまでは至っていない。これからも先、地域の学校に通いながら、ろう学校がサポートするかということとそれがなかなか難しいという。彼女が住んでいるコミューンが彼女のために高いお金をろう学校に対して支払わなければならない。サポートが必要であっても、それを実際ろう学校が行うと、当然人手が要る。それはしっかり予算に裏打ちされなければならないとのこと。子どものために現在ある様々な資源を、柔軟に有効に活用するという発想は必要だが、まだまだ学校単位の発想が強く、お金がどこから出るか、必要な人手をどう工面するかということが（管理職である）校長にとって大きな問題のようだ。

カナボックス難聴学校の取り組み

カナボックス学校は2度目の訪問だ。最初は、1999年に訪問している。ヨテボリ駅からトラムに乗って30分ほどで到着する。カナボックス「難聴」学校というが、難聴学校だけで成り立っているのではない。大半の生徒は健聴児だ。学校のあるコミューンから児童生徒が通う通常の基礎学校だ。その中に難聴学校が併設されている。その歴史は少々複雑だ。まずヨテボリ市にあったろう学校が統廃合された。この地域の子どもたちはヴェナーろう学校に通わなくてはならない。電車で1時間以上かかる。統廃合に反対した親たちはヨテボリ市に働きかけ、この難聴学校が設置された。したがって、他のろう学校がいずれも国立であるのに対して、この学校はコミューン立の学校だ。難聴学校は、ヨテボリ市域のいくつかのコミューンが共同出資して運営されている。この難聴の部門には独自の校長がいるので、難聴学級というよりも、やはり難聴「学校」だ。

カナボックス難聴学校を特徴づけるものとして、早くからCI児の支援をしてきた経緯がある。そのような歴史もあり、ろう教育関係者（当初はろう教育関係者はCIに反対していたた

め)からは長らくその存在自体が無視されてきた。1999年の調査のときも、カナバックス学校に行ってきたとろう教育関係者に話すと、多くの人が眉をひそめ、あそこはろう学校でない！と言われたものだ。もちろんその後、スウェーデンとろう教育の人工内耳に対する考え方も変化し、カナバックス学校の実践も評価されつつある(このあたりの経緯については、鳥越・クリスターソン(2003), p. 76-78を参照のこと)。

副校長からカナバックス難聴学校の現況について説明を受けた。まず学校の概要。5つの部門からなっているとのこと。生徒は全部で150人。

- ・1つが幼稚園。30人が在籍。言語障害のユニットとろう・難聴のユニットがある。ろう・難聴のユニットでは、手話、サインサポートスピーチ(口話つき手話)、スピーチが使われているとのこと。

- ・ろう児クラス。1年生から9年生まで。30人が在籍。手話を使用。生徒は補聴器をほとんどつけていない。「難聴学校」といっても、人数は少ないが「ろうクラス」もある。そういう意味では、今や「難聴学校」と「ろう学校」の区別はないと言えよう)

- ・難聴児クラス。1年生から9年生まで、70人が在籍。主にスピーチで授業。

- ・言語障害クラス。10人が在籍。3年ないし5年で地域の学校に帰すことを目標にしている。

- ・重複障害クラス。聴覚障害と知的障害を併せ持つ。15人が在籍。

ろう児クラスと難聴児クラスはフレキシブルに考えているとのこと。ニーズに応じて移ることも可。また体育や工作、美術などは合同授業。中にCI児が23人いる。職員は90人ほど。インテグレーションした生徒に対してのサービスは、興味はあるが、今のところしていない。この学校は1994年にできた。そのときの生徒数は25人。現在は150人、1997年には新校舎。かなり成功している学校と認識している。今地域のろう学校が5つ、それらの学校と競争している状態。カナバックスはコミュニンベースの学校。ヨテボリ地域は21のコミュニンからなっている。そのコミュニンから来る生徒は、安く本校に来ることができる。カナバックスはその21のコミュニンに対して責任を持っている。もちろん生徒の費用はコミュニンから支払われる。もし空きがあれば、ヨテボリ市域以外からも生徒を受け入れる。出身のコミュニンにchairを「売る」(と彼は言った)。ただし、その場合はかなり高い費用をそのコミュニンは負担することが必要とのこと。またカナバックスからインテグレーションして地域の学校に帰ることはないとのこと。難聴児やCI児のニーズがこの学校の活動で十分に満たされているのだろう。

また同じカナバックス学校内で、ろう児・難聴児と健聴児との交流があるのかと聞くと、ないという。体育館やグラウンド、図書館などは共有されているという。が、健聴児が特に手話を学ぶこともないという。そのあたりが日本の感覚と違う。また難聴児やろう児が外の学校との交流に出るといってもないらしい。彼らはめいっぱい、この学校のプログラムで学んでいる、やることはたくさんあってそんな余裕はないと副校長が言っていた。

少し教室を案内してもらった。8年生の難聴クラスを見学。2つのグループ(別の部屋)に分かれての数学の授業。1つは特別な支援がいるグループとのこと。それぞれ5-6人くらい。それぞれが教科書を広げ、勉強している。時々生徒が教師を呼び、個別的に指導を受ける。みんな進度が違うらしい。しばらくすると生徒が見学者である私に日本のことをいろいろと質問してきた。日本の人口や東京のことなど。ことばについても。日本人2人が数年前にこの学校を訪問したらしい。そのとき、日本語のいくつかのフレーズを学んだとのこと。1人の生徒が

「こんにちは」と口話ではっきりと発音する。生徒はほとんど手話を使わず、口話だけ。先生も口話で話すが、時々手話も併用。日本語の表記（漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字など）に話が大いに盛り上がった。

今度はろうクラスへ。7から9年生の合同クラス。先生は手話のみ（スピーチは使用せず）を使って、生徒に話していた。生徒数は5人。基本的には年齢相当のレベルで授業が進行しているとのこと。2人（9年生）の生徒はすでにオレブリューのギムナジウム（ろう高等学校）への入学が決定しているとのこと。別の1人の生徒はイラクからの移民の子弟。スウェーデンに来たときは手話もできないし、書くこともできなかったという。学習面ではなかなか厳しい状況だとのこと。

副校長に最近5年間のろう教育の変化についてうかがった。カナボックスは時代を先取りして取り組みを進めてきたが、この5年間に限っても大きく変化しつつあるとのこと。CIの装用時期が早くなってきている、技術がどんどん進歩している、ますます聴覚の活用ができるようになってきた、常に知識や対応をアップデートする必要があるとのこと。「フレキシブル（柔軟性）」というのが今のろう・難聴児教育のキーワードのようだ。以前、グニラ・クリスターソンさん（当時、スウェーデン障害児教育研究所・研究員）が、日本での講演の中で、トータルコミュニケーション法からバイリンガル法に変わった時の話で、「変化には時間と労力が必要」と表現していたが、今の変化には、労力はもちろん必要だが、時間はあまりかけていられないようだ。あまりにも変化が早い。ろう学校・難聴学校の訪問でそんな印象を受けた。

この後、ストックホルムに戻り、以前3年前に通い続けたマニラろう学校を訪問することになる。当時は小学1年から3年まで子どもたちの成長を追いかけた。今回の訪問では、その後の子どもたちの成長（7年生になっている）を見たいというのが1つの目的。そして、アルビック難聴学校を見学すること。以前、日本にもお呼びしたこともあるグニラ・クリスターソンさん（前出、「アダムスブック」の著者）が、このアルビック難聴学校の副校長になっていたのだ。彼女から是非とも学校を見てほしいとメールがあった。そして3つ目に、是非とも調査しなくてはならないことがある。このマニラろう学校とアルビック難聴学校の統合問題が起きているのである。すでに具体的な統合の手順に入っている。生徒の相互訪問による共同学習の試みも進められつつある。なぜ統合なのか。どこまでろう教育・難聴児教育が変わろうとしているのだろうか？そして最後に、ストックホルムにろう児・難聴児のためのフリースクールができたという。親たちが中心になって設立・運営されているとのこと。手話を活用するろう学校があり、聴覚を活用する難聴学校があり、また親たちの思いからできたフリースクールがある。是非とも現場を見たいと思った。

（つづく）